かまくらの一莖あり四つさゝ
葉をまし たゝうの生のかたちに
をまひ井泉のかたちさゝ面に
うるをふいさ紀よく曠野の虹のい
ちもちをたゝんさてちて
しぬ峯のまりか勢のこまに
かよさましゝいつまの結ちたゝん
ちの形もあり行もゝ面のちく
ち俳きをしめるハ嘈々としてとゝ

撥面の声おのづからなりされいいう
なる移ふやあるうらん亡師こゝを
影しゝ獨ゝ芭蕉の筆をゝ流
うんと幽居閑遊のゝちなるも逝ふ
獨りの言し乱まをかきめもしし。
かゝふゝを今ニむゝし三昔ふるもの
ゝ甚筆いまかいを墨なを硯ふ
ゝゝゝ紙ちとおゆるを閑伽の机
ゝゝ此日菩提寺ふまれ

を紙誰かれ曰知己門人等ゝ韻九十
九を紙ぎゝ一まゝ紀ゝなし屋ゝ屋ゝ
折のゝゝる古筆をとゝるゝ志のふ
ゝゝなゝゝゝふ人ゝの志きゝ撥香
ゆひゝゝ包ゝゝゝゝしゝゝゝの数
又ゝれなゝぬはゝゝ秋ふゆのくさく
もゝな一佛筆のゝふのゝゝゝふを八あハせ
ゝゝゝゝ小筆ゝゝゝゝゝ紙ふゝ面し
ゝゝゝのおゝゝゝゝ上ゝの巻ふも

ことをうあきらめさんをおなしこと
ともいふめるハむらくもの山乃研をる
なくと楊ゑ雲ゑ樵夫ハ歌
ぬ〳〵しきれたるくいうをせん報恩
謝徳のこゝ話ちせ説ちとせ集の名を
つゝたくことをいきこのの面侍りぬ

金蓮社吉原

追悼百韻

獨立て芭蕉ハ筆を試ん　古人　超波
秋よきれゝ添徐逸の履　王蛾
いくゝ年たゝ〇紫八月涵く　有佐
翌出ふよ〳〵に深く河舟　桑也
松風我ハ新なる酒の袴　祇丞
黒い兎ゑよめゝせよゝ　買明

中百も角前髪ハ半ひよ記　旨原
雪をくゆらす俳巻の寵　超雪
ウ
葉北穂ヨ下りて庇いたも軌雀　平砌
出女の身乃昼を観すな　書永
むつ〻き守本昔や亥の世ヨ　庭臺
夏も伏籠に浩衣おとく　清泉
昨立小紺青乃けな絹障子　海如
すゝ画わるる多羅葉の音　渭洲

我俗をいつく老賢のくふも出次　塵匣
秋も宮中小蕎麥の記を書　東為
振衣月も昨日の城佐るふ沈　超雪
菜名祭ヨ宮を越ちゆく　蓮谷
鉄橋小十ヒ並へ一生　可容
居合も高らす今ヨ小形　六味
夷すら江戸ヨ子を蝶や色　祇丞
廣く封て　初妻乃状　坐岩

摺ゝ木の開生度よみるめさえ　其畔
禅を掃くゝ玉はゝきうれ　笙客
ほたれなり橋ひく牛の車ずま　麗洲
雲乃峰きり町れ突抜　一蜂
古用平原義の衣もこきませて　桑楊
むよろぼと伸し妹の神の末　風至
志のゝ山以つを姉志の心なり　虹波
後り梅ほこ十四月日　氏野

多川多潮くゝ夢を清ふかと　千尺
るのひらて火を寒ふ菴宮　九波
ほゝきすほつさ結ひや名僧校　丈國
慾をもるまこ高かめる黄金　春藤
焼拾ゝ志の神を月乃雲　玄永
茅茎のかゝり風れまゝく　宇右
淺茅原法の問屋乃雲やらん　ちかゝ
律師よ成て止れ楊弓　あつゝ

漫成小折の句ひ乃うつりゝ　星波

下弦枕よ温泉山の犬　素海

宗因屯に摺蓮ふたゝび神ゝ　彩

中さくゝ小法局の奇　明

宴よ時の鼓　ゝう法ゝ人　機

牢の屋ゝまきく我もわきゝ　京

捐打嵐の胡乃月頭ゝい　素海

筏をワゝ折谷川の鹿　如

う抜ゝ寒く下向ゝうの身延山　也

包ゝ武つを荷如　掛　指　傳

花咲て今多の深い先明如　明

芽を吹出す門のかゝり　亟

ひち笠よ事觸走る雲の面　如

鼻毛の強い鼻毛ぬく為　砂

書ツミ乃くゝ花咲ゝ所方ハ明筆筍　京

瓦灯の窓も寒ゝ　仰文　永

鶯の声は一段たるく代かゆる使
眼もとうの動く伏勢若
國紙が焼仮ふる絢合次繻
猫のまゝよ入梅や入らむ彩
拘病ハ伽の背中を几虫
ごんと雲きく結蕃乃栄や
父為き髄や聖路よかゝ為ん妙
由紘西一紀黒羽の馬士鴨

為的よ記くゝ文たこを麻ちる里彩
雲も東と為れも雑巾蕎
あさ陶き盃の帝僧乃挟箱若
為らいのうちは人と黙礼蛾
引拎茅祭の巾懸檜柱彩
病百のやうよ船の焼下使
射ひとり紐の付たる角巾や
滅〻紙よハ笑ふ狗云

水者月も動うゝ昇く出る如
灯にむ千うる枝の末急砂
影かく休むもたの茅垣の影
千年屋のうゝ淵の底
通魚の著門形く駕北棚
四十を誠して初いたく軍
亥の公事岩人よ若かハ立て
討汁の臺乃中のいとゆふ

圖法師よ深こそ分れ二ヨ矣
屋敷の米を挾持よ咬知ル
築山乃裏城かゝむ竹簀子
子を敷へ行く炎天の蜂
拾ふ日い底なき碧の友なき
歌舞妓の為物寺よ横亦
為縁を居風呂まく北侍ひ乃
座敷い内ニ蔵ゆるゆゝ

城如砂や侍影亟昭

吉原の面ハ江人笑姫人　彩
池田うち称ふ仕ふ原占　蓋
冬篭氣ハ[illegible]ちゆに成よう　吉
家充似合ハぬ殿の丈　原
身あらきつ記ぢ北登之　や
樂ゐて作ふく天人の形　如
名ウ
古郷の物を笑の小引出　彩
院宣ひらく一門乃数　玉

六

鞍馬ゆく人ふ[illegible]啓日　彩
石の井筒も責新道　蛾
公家よ付麻上下の弟殿　原
給ゆく求め足消を燕　や
お八ッかゝ夕ゆよ初冬花墨　砂
法のむ一石や炉を塞く法　百菴

追悼

十七年の光陰を経て近き友の夕顔
咲むを惜しみ偲ぶ俳句を目の当たりにする
思ひ出を語り合ひつつ我に返るや

存義

看病の暇々に澤山おくりし出句

病床を出でて十五秋の月くまなく
とりにハ向ふ人なき十五秋のむなしさ
我君に寄るおいくをおもふ人の
多のあにとつ向ふきわるるあと
古すたものの名を白ひろ千佳く招
魂寄席なり

存義

古に立り　手帰りの魂祭

紀逸

初盆仏現世無ハ去りし年の人の
天其才我貧しても齢をおかさ
ものの人の幸かの
ものの人の

紀逸

勿小志又多の我多船る年忌

楼川

独歩者の三昌ハ我家の仏ずまく紀逸

露

湖十

覚ゆる人の身日ハ茅舎

実技れよりハ十七年

音ハ（ぬ）彼ハ（ま）きく萩のうへ

紀逸

秋涼ずまき元禄清水九

再賀

秋の色ホのふハ京小俳る九

珠来

お彼の者の四ハよ紀
なりき十七年の夏海
よ人ひ者れと多
乃よ八て七年ぶ

萬立

嗅ぎ塚を幸あきの草所

秀億

一掬の水の月ゆ（む）道

彼者去て十七年ぶ妙仏之

月ハ梦之殘篠　吉門
ほの影を月ハ木陰の星合哉　嘉廷
廷叟ハ嵯峨ハ社住句を
蘭尾牡丹を向原ん十七屋　栖雁

超波居士十七周忌

帛蚕むかしや秋の憔悴て　雑口
まゆ籠やおくとて祖の書　柳尾
遠おふひをきたる梅れそと
きりはの蓼をかきく
窮や人其ゆとなつかしの萩あるは　由林
巻ゆすぬの灯影や庵の文身　田社

超氏の寺を忘にかの引墨の梅ちる
功しを懐かし

ちる秋の雲志をたくや古懐の　圖大
碑の窮や十七りをめぐる春　露牙

日草春里浄光寺院之内向于　獨菴之碑而述
今歳此秋十七周遠忌之懐旧

我の法世超と奉る交世せ　今夜いたく
昔ゆいまう六旬のちかきまてちるかくの二ひて
ちる秋のすゑのはまれ　江湖の尾久と以ふ所に
すゑ　の宗をきくめてまもるに世にすす
てくれる俺人の恵にわれ　江都に
面白せる旦々の往来ちの　生ちの碑ち前を為ふと
ふ　おすすに　ちの　ちに
周ちの日ふ　ちなるわ　ちに
行俺ひ　ひ　ちを懐ひ　ひ　時

老ほまを月春日ふ　春来

追悼 并四季之催喰 任到来之遅速定篇序之前後

たろ雪や小判の俵を二むら　虹波
ちくり上をるる京の一　星波
大寺をあゝまろかすかな　九波

郝隆曝腹中書

日に晒ぬ腹おかゝねを涼しさ　敬齋
ちゝ家や一目小かゝ橋の上　水路
鐘ぬきの撞ぬしやあ木茶ぬ　花六
撞ひゝろ棲を一川落ふり　藤橋
初ゆきや加賀ぬ仕業世襲　幸之

既ぬ牧ぬ角を穂小出しの月　其畔
ぬ月や此ぬ入あゝの音なし　千尺
あきゝ家や何をちかゝ芝ぬ上　風至
岩ぬ京是ゝり以さ也笹鶯　千之
新豆腐ぬ名のあとゝり秋　超國
小角や罪なく尺なる舞永　來至
年代を二日間やゝすゝみ　羅来
衣ぬに茶碗酒ぬ秋ぬき　馬原
居姿を立すゝ小を身ぬ北　連城
褌や腐き柱ぬ声　東壁

草の花よ雀すまるの魂ぞ　夫菜

世の木くの時なつめて横ぶ　栄夫

歌を子も乗紙出よりの花　壮夫

何をたて為るむる枝の秋雲　亀成

山るも古井の一ひく蓬の声　連舎

[illegible]の八百負の四方ひとつの先こちら
三角のあわとまの角八ちかく光角つまき
もの〳〵又かな

活の山角三夕雲の月涙ぶ　百菴

碑の古び谷の八雲而　二調

七夕も十夜も巡れ墓の秋　氏野

清水新結ぶ秋自原月明

真弓子菓子の奢や秋の花　可容

梅の咲く牡丹餅の出る古ぶ　里郷

雪もちて霰とぶ山さ〳〵　貞橋

光陰の矢の如く世を行雲　信鳥

傘の雨のさ〳〵ぶ　萬花

すゝきの原の盆月　仙李

離半ば大工を一日ちやかへ　暁翁

暗加の四十の積る屋ぶ　蘭泉

心意を塗てかける干菜ぶ　笠澤

左佼

日暮里の碑にもたれて秋の雲　凡鳥

なつかしや十七文字の秋ぶすま　龍眠

松の木に家中ねる雲雀哉　東爲

細い月手足をちぢめ寒哉　鯉藤

正月幾日の出　影もあの谷　其庸

雪ごもりのきのふ八百屋初時雨　曉市

秋八重咲て萩見しあるあかつき　蛇水

月や雲を出むふ中潛　四明

芦の葉にかくる氷柱の暁の色　麗洲

今一度咲かまむ本紅重　湖天

蟬の鳴ぬきれて弱かな　連馬

初雪の一斤側くる流哉　野牛

魂棚をひとわの彦哉　少秋

浦月ふる園の骨ハなひぬ風　素雲

[illegible]

目か青葉耳てあかりとを初鰹　雪定

たつ[illegible]や空ふ忘れぬ十七字　社鼠

花を見る日如[illegible]なりて蒲ふ扨　秀谷

鶯鮮の見ゆる日よりや[illegible]　程祥

[illegible]の[illegible]へて峰の[illegible]扨　花子

[illegible]ちんてまるぬ雲の小[illegible]扨　催耕

[illegible]の[illegible]や[illegible]木をかきんなる　諌子

[illegible]おて　鬱[illegible]を咲る杜丹扨　和山

嵐尾草の雲四今ハ音ふのみ　笙容

名序　ふ[illegible]合ふの間もなし　啓史

日[illegible]つ[illegible]や[illegible]ふ[illegible]考る[illegible]迷　芝光

ちよ[illegible]ら桶て[illegible]一葉扨　狸眠

花て[illegible]よ[illegible]を埋る蓮扨　海少

[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]色を[illegible]の[illegible]ふ　南樓

[illegible]ハ[illegible]ハ凄[illegible]ん[illegible]る　魚明

[illegible]の[illegible]日ふ[illegible]る[illegible]れ扨　左竹

[illegible]日[illegible]ふ[illegible]の[illegible]　友以

袖[illegible]世十七回と　[illegible]　栢莚

音なくて目ゐる秋を天の川　蟠乗
たゆたふを待つは奇なる根の花　言海
新僧茂迂ひなかふ　蓮花　専里
初雁や近江絵さして都の色　百宇
笠の見や新もみ田　田舎人　雅光
佛さの画ゑもわぬうんこ雪　五雲

[illegible]し狂句贈られし事を

秋月壱清支なる　佛　九　雀童
索縄の拔れ出き枝を　魯才
田もたゝ[illegible]ける高はつを身雨　東巴

誰去や干鮑干鮑何太素つ　卜尺
あ[illegible]き人を集て[illegible]の月　破笠

古野屋の什[illegible]をあつひして

霞拾て祝ちわぬさを草をあめ　梅戸
けゆ[illegible]れ松震て[illegible]　夜白
稲妻のたちいて行やを行簑　溪梁
闇て出て宿さ恋一廉月壱　萬輅
白河へ立て中て[illegible]　淅江
雨なくハたゝれ枝を初雪も　硯壽
半もたゝ形も連歌の付の加戸屋義　寥和

昨日の月花をさそふ桂棟九　一麿
雲霧去行　所々神たてき　森羅
合歓の花ハ仰ぐ人へ九　密房
夏椿の白かりしるる呉服店　洞什
扇風気や　古へ忍逆稚すゝ　釣深
ひと日ふる日雲ふた秋の暑九　東呉

庭中

夏雨や　古の井あり　ふきの苔　五星
きみられや人ふる部屋をふ可ひろと　夏若
秋の雨ふる日まわの光る彼岸九　孟津

今ハな　暁さ萩の友　文國

（萩の花を乃逸に乃の素麺仙を集るの素麺を贈て）

心を祖とする月を勝前の鵲尾をあす　寧卿
かけよ庵ハ猫あるし　相大橋　少長
四つ小打角にちろ　雲頭巾　正因
すけかる蔡の跡の園加なの　杉風
角めける陶をかなの　簟　思路
梱一茶十七文字の跡まを　さかゝ
人さゝた馬を居眠るいつさ九　来我
部公ニる　頭ハ浪のうへ　黒露

[illegible]の[illegible]の[illegible]や[illegible]畑　春義

稲妻よの痩ゝさま[illegible]の[illegible]　塵匣

むかし[illegible]郷[illegible]の[illegible]

[illegible]

なりて[illegible]

其ゝの[illegible]

忘れぬそ馴深の筋弓墓　糸　蓮谷

[illegible]　篠弓なりけり　雲儀

[illegible]門は灯籠代　宗吟

世の中[illegible]八迄り灯籠代　宗成

云やゝぬ秋の日[illegible]や十七字　賀亭

自入て[illegible]目[illegible]童[illegible]花　友志

童の棹ゝあるまや　飛蛍

雪ほゝ[illegible]秋の[illegible]代　春武

[illegible]ぬ[illegible]の菜山る代　田女

おふく焚[illegible]あ[illegible]れ[illegible]　坐岩

[illegible]の[illegible]の[illegible]一[illegible]の[illegible]　連城

初秋や[illegible]　冨生

利耳ゝ左[illegible]　原富

関の戸ゝ一羽立込ちより代　馬三

角ぎれて[illegible]を時雨や萩の奥　春埜

飛ゝゝ暮残ゝゝ[illegible]の花　山帯

山もや四方[illegible]尺[illegible]花ゝ雪　岩久

表具やを五色の雲や涅槃像　春光
法の花の衣ハ相の一染代　魯文
文郎花かきつらねぬ小紋代　東中
小車や形の月の九　陶巾
地ちりのふるさとのうかぶ猶　蓮干
月の前を通ハ縁ある人　子因
立ッよりきく垂の掛ちぬ千代　其篭
夏ものの悲やものすてた乃色　麦雨
咲中ありきく杖へ杨の花　素竹
秋雨乃かくらぬ袖も涙代　関月

羽ばたのひを不肖く所ろ丁　仙杖
秋立や（二十七京仙乃秀句より）月窓ハ風涼乃　試川
人絶て清を求や峰ハ時ち　宜通
夜明ぬや二すち三節源氏雲　楓手
昆蒻の色を見きわ時雨雲　藻舞
夏山や日盛かく雲の谷　鉄突
船点や宵ハ月ハ雲ハ先　挽里
きみかれや月ハ日ハ窓一つ　賦尺
入あや花の人ハ雲の月　埃菴
ちり紙の音ハ乱ハ清水代　長梢

草枕なほ雫子の古かこ　貫至
家建一条を拾ふる羽撃尤　万守
鶏かほの景庚々爰やこむか　三壽
夏衣掘かるまほ世尤　一蜂
又爲の亭主城一る巨燈尤　和喬
禁苑とは花ま名乗せを向草　ゑゑ
槌ひと月笠の風ゆ五月雨　阿誰
秋々日や早くむすと成ゑ　沾鼎
書扣や棒すもきとて一葉庵　南溪
味ひすい仰るゑ菊々酒　道院

十七

雷々音や雲むの穴　一夏
以仰や花の位をんの海　緑之
解を風結ふを風の柄尤　菊院
めんゑの日城砌も雑子尤　眠江
一ト寸ゑすもれる巨燈尤　達平
花盛京を行馬かゑ車　鄭江
上下ゑゑ日を降ゑ杉菜尤　土口
谷川す近きゑ岳尤　老山
葬や升　馬塵

動ずるまわ恋ひ十七屋　呑江
旅人の食ひの巻や夕かすみ　豆玄
陽炎やまゆ八陣一宮の松　六器
くれなゐの潮を透せば花　三笑
さきたる梅の山の手　亀好
公方やまゆの術　秋の月　白清
持佛ゐ八鳥と寸法　波山
世の中や捕を雑と黄八茄子　葛道
等や制れの公を代　松郷
寄る家の姿あるれや灯籠　百道

楪屋の肩ゆ見れば　呼童
（夜陰の月の光）
（月を）
々くれの三きかけて夏の秋　起月
芋の月も知てもゆ悔の色　泰國
撞木の屋一輪あるは花盗　律砂
くれ雲や月ゆ馬の巻　菜陽
夏屋や柳の（大仏誹諧を悔て遠寄の高寺）　芦郷
南無仏ゆ八桐の散ゆ我き　駕狗
誹諧の程弦巻　春かゆ　浦口
炭竈ゆ一日ゆ志ゆ山さく　沾古

さゝまきあり小袖の梅や朧月　女花井

芦の葉や三日月かゝる秋の雪　義莚

楢生士郎古餘波德亞隣

維君子今餘波德亞隣

碑の苔ふるり盛なる萩ハ枯れと　渭洲

小車や十七夜の月ふの花　来揚

大滝の音ハまるのて寒しまさる　沾國

おき魂を招きか〳〵せやをすき　梅動

風や竹ゆを流る宗伐恆　北魚

ゆふ人なき古俵なる名て辻角力　菊阿

きみれや静子余所ゆの面　六窓

鉄砲の音ハ鳴く秋の衣　一馬

梅の香を加へて出雲屋の任代　爲六

手鞠の月ほのきと打る宵代　味竹

ぶらふや桑の実の実の色　南浦

月雪の中の香ひや菊の花　花砾

さゝ〳〵代見の振舞滝の下　百至

衣〳〵や雪の枝打の萩　宗之

初秋や今朝より音の百枝打　松春

魂祭庭補の隅や寺の門　立志
水隈や吹抜屋敷の庭　舞雇
鯉を今朝走る氷結　貢　畔水
咲ちらす桟橋有り罌粟花　馬朝
春風の吹ちらす足袋彼岸　春色
印旛沼や茶かぶり細流　和交
かすみ香をとゞに吹ぬ簾　殘杏
禪一巻きひらや冬ゆる　萬峨
花の陰なくゆき谷中　熊文
花ちるゝ八門よりさせん蹴躅賣　孤吟

横穂すゝ人の姿や頬かゝる　松童
水底に桜の影や日影　秀波
霧の音や鼻の先なる松　冬野
猿引や其手ゝを我子より　曽嵐
光陰を山門を捨る氷　聞行
山門を這ふて月や時雨雲　超風
夏月や佛の国の使ひ　馬雲
傘に油引　鮭夕
五月雨や日や秋の蝶　魚川
秋の板の客四五人や　斗合

玉と吐出を拾ふ人さまて
十四日七夕

青朱肉蒐麻子の我身おもひ出　太祇
雨ぞれを飛さく散る軒燕　仙魚
一すちに立る碑有萩の花　萩邑
弦膽の遠きや花の讓葉合　可圭
炭賣や小野とかの家よりの色　十家
音楽の聲は舎人の律の風　丹鳳
蘭は是れにのさ原ひ出　如轍
秋日や碑に花光る仲光忌　梅道
ひとすらに鳴む番はの系出　砂永

灌佛の後堂なる寂釋迦　清秋

詣諏方碑

下冷や手のひらに知る塚の前　六味
極楽の谷中なる塔の彼岸　曙山
草くさは弱の花さく谷中　十町
新しく撞ひくく　更衣　仙菓
物をすむ其日涼　玉祭　呉壽
塔くの岸に船を行彼　魚示
裸方へ赤ておる　蓮花　杉虹
待や心を寄る月　梅幸

吹雪日ハ梶乃ちる尾花哉　栄峨
柴ゆゑ障の明や二三日　柳江
猶糸屋ハ宗し川　徐　梁雲
撰ふ花ふ春の光やまん簾　嵩指
叡山ハ覚へてゆるる雁乃色　三井
脇指ハ　か減ハなりて踊哉　慶子
下司乃楽佛の示を涅槃哉　秋助
秋毎ハ忘れぬ艸の白ひ哉　一中
月哉見てちゝ路の橋をすゝ枯哉　子中
枯ゝ枝ハ金乃なる木ゝ乃月　千國

光堂を見ゆ沖ハ梅の香　氷羅
唐土乃ゝ書ゆ山ゆ雪の津　欣洲
星合ハ月より前の雲乃秋　蕉庵
かくなる枯のゝきや蓼の花　盛府
蓊や推ゆ寄くゝ戸ハむかゝ　馬陵
初人乃枯ハきゝ元ゝ月ハ永　春川
炉煙ハ首ゝ苔ゝ若壮　鷺石
秋乃来てあゝれゝ刻む茄子哉　鬼雀
清僧乃我れハむゝそ秋の色　万里

追薦

古獨庵今秋かゝりし時難波江のよしあしもなく生涯の句を書残されし小冊あり末期の記念にと予に贈られけれはかたみとおもひおきしを今は門人されとも心にまかせて句集よりて撰出し章句のなかに十七章抜並へて聊か追福をなすことしかり

発句帳繰れは声悲し秋の風　玉蛾

ある人文月十五日の七日古独庵を忌するとて門人を来をまねきて追福の一集を催

さきより撰られた事をなしめ交をさる故其いかに展をあの夕一句我そらしね牌前に手向るのみ

十七年先乃ちきりや墓まいり　蘇也

追福

むかし獨菴子俳諧の本意をつかしとて世にわりの思ひなく事あるかなしたるしかし三吟して名柄杖と云題る集乃平をなしあらは其事は今とさしてふみはしめし種を父乃古事とみめをこそ高田の茂十爆子譜て清水氏か家よりこの乃画像を貰して

これを家つとにせられしに一族の
人〻寄りあひて其の宿にあまりむ
きおとゝいつまでもと今さらふる
ことをくりかへし戌めて一とせ大や
十七周忌われかれおもひ出て唯
碑前に向ひて嘆するのみ

我像をまつるや霊の一身田　有佐

文月すゑの七日日暮れ里へ帰りて

極楽や十七文字を石の露　仝

長病の耳うるさくあはれあはれと
あるとし

東西の指佛に古し名角力　平砂

夕暮の點印は亡師よりも傳えて
予が艸庵の本尊とおもへるに

年ありし志あれば彫刻のさまは
うすろぎ字形もちびたれども今は
師の面影は文字いまだのこりてとし
ある光陰を石のなくなくに感じ
懐旧の涙とゞむる事あたはざりし事

三夕の肉を痩せ十七年　祇丞

先師標月菴のまかせ給ひてよりの
三夕の点下へ紙に書かれたるを傳くるを
の号へ予これを得て今其業を
あらそひとつの師の流れにし
よれそひなり光陰隙なく十
七回忌と成ぬよつて此小冊をあらはして
碑前に手向け又師の志を継く
に近からんか

まりの本へし古き庵の秋の暮　買明

懐古

町ちかくなりまさりてせをこえ
ゆくすゑ乃眼ふを見えぬや獨芝居　吉原

掃待やせめて水汲柴を折　百勺乃巻頭ハ故叟のめてられし　超雪

面影かくるゝや芭蕉の筆はじめ　書永

大人磐吾道爾多氣賜邊之刺在須賀
留理都世疫爾僕幸比無豆那今其志
乎繼奈留四人乃主乃侍不人人乃

列仁侍類茲年一十有七回乃月
日爾邦毛彼面影等言乃葉乎梓爾
彫豆四人餓遠手墓夫詞嗚友垣
仁需天奉礼爾類秋爾之母有氣礼波

句衰以豆法乃子種也積留秋　庭臺

極楽に師とをもて十七回忌となりぬ
弔ふ祇園の名ハ年ハ同じ

為乃秋を忘れハせなの十七年　清泉

涼冷乃伸光すゝまんとて
賜ふひくを句とあれや一枚の水　海如

[illegible]菜乃画譜の附
今體の佳什あつめ輯録
人〻命をしてたれ繕寫
[illegible]むし辭するゆゑ
[illegible]買喫茶稿年従
[illegible]一句かはる間耳
[illegible]名の芭蕉葉なりし
[illegible]秃筆の加はる
[illegible]おそれハ差訛あらんを
大乎林律砂書

宵裏紙巨筆白巾の
筆找乃義ふ以後亦く其
毛如形〻て一畫以まる
部羅須一體点亦
阿〻以後破わすかれ寿又
面形〻〻久金の辭を

響のしめ一枚越るこさ夜の
十七度心尽て出る孫を添
玉城南す羽衣葉きらけす
出そきそ浅葉乃一きす
寒暑六度不変

羽衣軒 紫井

松葉軒